

論文の要旨

論文題目 身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究
氏名 有園 智美
学位 博士(文学)
授与年月日 平成21年2月27日

本研究は、身体部位詞を構成要素に持つ日本語の慣用表現に対する、認知言語学に基づく研究である。認知言語学では、言語の意味は、我々の概念体系から切り離された単なる現実世界の反映としてではなく、人間の身体経験に動機づけられた、言語使用者による外界認識の産物であると考えられる。このような観点から慣用表現の意味を分析することによって、我々が世界をどのように把握しているかということについて、その一端を示すことができる。

本研究での分析の主軸となるのは、意味的分解可能性 (semantic decomposability) である。意味的分解可能性とは、複合表現の構成要素の意味が、表現全体の意味に貢献する程度である。これまでの慣用表現研究は、意味的に分解不可能な表現を主たる研究対象とするものが多かったが、本研究は、意味的に分解不可能な表現と分解可能な表現の両者を研究対象とし、それぞれの意味的性質と統語的性質を詳細に分析することによって、「身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現」というカテゴリー全体の性質を明らかにすることを目指すものである。

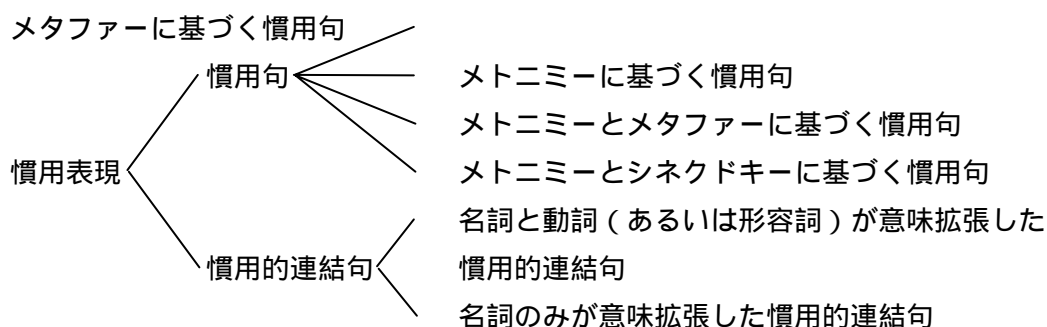
日本語の慣用句に対するこれまでの研究では、「目が肥える」のように、構成要素の意味が全体の慣用的意味の一部に貢献している(分解可能である)が、その語の結び付きが慣習的に定着しているような表現(「連語」)は、意味と形式がある程度固定しているという点では広義の慣用句に含まれるが、「慣用句は構成要素の意味から全体の意味が引き出せない」という定義に反するものとして慣用句とは区別され、詳しく論じられてこなかった。本研究では、先行研究と同様に、慣用句、連語(本研究における慣用的連結句)、一般的な語連結を、連続体を成しながらも区別できるものとして扱い、意味と形式が固定している前者二つを慣用表現と見なし、これまで詳しく論じられてこなかった慣用的連結句についても考察を加えている。このように、慣用句と慣用的連結句の両者を分析対象とすることで、慣用表現の意味的性質のみならず、統語的性質についてもより包括的な分析を行うことが可能になっている。各章の概要は以下の通りである。

第1章では、これまでの慣用表現研究の流れを概観し、慣用表現研究においてどのような問題が扱われてきたかを見た。そのうえで、身体部位詞という特定の構成要素を持つ慣用表現の全体像を示すという本研究の目的について述べ、本研究の構成の概略を示した。

第2章では、認知言語学において用いられる、意味の拡張に関わる基本的概念(フレー

ム、メタファー、メトニミー、シネクドキー)を取り挙げ、その整理を行った。特にメタファーとメトニミーの定義については、Lakoff に代表される概念領域重視の立場と、初山に代表される二つの事物の関係性重視の立場があり、これらについて詳述した。そのうえで本研究は、初山の立場をとることにより、複数の意味拡張の仕組みが関与して意味が拡張している表現を適切に扱うことができるということを、実例を提示して論じた。

第3章では、Nunberg (1978)、Gibbs (1994)、国広(1985)などを踏まえ、身体部位詞を構成要素に持つ日本語の慣用表現を、意味的分解可能性に基づき、分解不可能な慣用表現(慣用句)と分解可能な慣用表現(慣用的連結句)に分類した。また、それぞれの分類においてどのように慣用的意味が成立するかに基づいて以下のような下位分類を行った。



慣用句については、初山(1997)を踏まえ、慣用的意味の成立に関与する意味拡張の仕組みによって - の4つに下位分類した。また、慣用的連結句については、 のように、名詞と動詞(あるいは形容詞)の意味が両方拡張しているか、あるいは名詞の意味のみが拡張しているかによって下位分類した。

また、第3章ではイディオム性(idiomatcity)についても論じた。イディオム性とは、第1章で述べたように、統語的固定性(慣用表現によってある種の文法操作を適用できない場合があること)、比喻性(慣用表現の意味は比喻により成立していること)、情緒・評価性(慣用表現は、ある事態に対する特定の評価や感情的態度を示唆するために用いられること)など、いくつかの性質を基に判断される「慣用表現らしさ」である。慣用句は、構成要素同士が連結した形で句全体の意味が拡張し、慣用的意味が成立しているので、必然的に構成要素同士の結びつきが強く、個々の構成要素の意味が拡張した慣用的連結句よりもイディオム性の程度は高い。また、慣用的連結句においては、名詞と動詞(あるいは形容詞)の両者の意味が拡張している場合、慣用的意味の成立は構成要素同士の意味の依存の度合いが大きい(結びつきが強い)が、一方の構成要素のみが拡張している場合は構成要素同士の依存の度合いは小さく(結びつきは弱く)、イディオム性の程度が低い(つまり、より語連結に近い)。以上のように、本研究で提示した分類によって、慣用表現におけるイディオム性の程度の高低を捉えることが可能になった。

第4章では、慣用表現の主要な特徴として多くの研究で論じられてきた統語的固定性を、第3章で提示した慣用表現の意味的分解可能性の観点から分析した。本研究では、「手」

「口」、「頭」を構成要素に持つ91の慣用表現(45の慣用句と46の慣用的連結句)に7つの文法操作(関係節化、受動化/使役化、取り立て助詞付加など)を適用させ、分類ごとにその平均適用数を算出した。結果として、慣用句と慣用的連結句で、適用可能な文法操作数の平均に2.4の差があり、「意味的分解可能性が統語的固定性に影響を与える」というGibbs and Nayak (1989)のイディオム分解仮説が、日本語の慣用表現においても有効であることを示した。

また、日本語の動詞慣用表現の統語的固定性に関するこれまでの研究では、意味的に分解可能なものとそうでないものが分析対象として一括して扱われてきたため、先行研究によって、文法操作の適用可能性の順序が異なることがあった。しかし、この順序は、その表現が意味的に分解可能か否かによって異なるので、2つのタイプを考慮せずに、正確な統語的固定性の度合いを計ることはできない。本研究では、慣用表現の2つのタイプごとに適用の割合を見ることによって、統語的固定性に対する意味的分解可能性の影響を明らかにできただけでなく、慣用表現に対する文法操作の適用の難易を、よりの確に捉えることもできた。

第5章では、慣用句と慣用的連結句それぞれの慣用的意味の成立に対する動機づけを明らかにすることによって、身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の意味の性質を明らかにした。

慣用句に関しては、その表現全体の文字通りの意味から慣用的意味が生じる際に、具体的にどのような意味拡張の仕組みが関与しているかを明らかにした。身体部位詞を構成要素に持つ慣用句では、()人間の性質に関する慣用的意味を表すもの、()人間の(日常生活において我々が関心を持つ)行為の意味を表すもの、()人間の精神に関する慣用的意味を表すものに大別できる。

()の意味を表す慣用句は、「身体部位詞(+助詞)+形容詞」の形式で、文字通りの意味が身体部位の特徴を表すものである(「尻が軽い」、「胸が狭い」など)。このタイプの慣用句には、「尻が軽い」のように、二段階の意味拡張(因果関係に基づくメトニミーと、それによって生じた意味との類似性に基づくメタファー)を経て慣用的意味が成立するものと、「胸が狭い」のように、以下の()で論じる 身体(部位)を、精神活動の容器として捉える という概念メタファーによって慣用的意味が成立するものがある。前者の慣用句の慣用的意味は、人間の性質のうち特に<行動的特徴>を表し、後者の慣用句の慣用的意味は、人間の性質のうち<精神的特徴>を表している。

()の意味を表す慣用句は、文字通りの意味が身体部位に関する特定の行為を表すものである(「手を付ける」、「足を抜く」、「腰を据える」など)。このタイプの慣用句の意味の成立に関与する意味拡張の仕組みを以下に示す。

- (1) a. 物事との関与を、物体との接触を通して捉える という概念メタファー(「手を付ける」など)
- b. 物事の進展を、身体運動としての前進を通して捉える という概念

メタファー（「足を止める」など）

- c. ある世界・分野との関与を、泥沼にはまることを通して捉える という概念メタファー（「足を突っ込む」など）
- d. 新たに何かを行う／現状を維持することを、立つ／座っていることを通して捉える という概念メタファー（「腰を上げる」など）
- e. 思考を、摂食を通して捉える という概念メタファー（「胸につかえる」など）
- f. 摂食によって、生活を捉える という部分全体関係に基づくメトニミー（「口が干上がる」など）

()の意味を表す慣用句は、文字通りの意味が身体（部位）の状態（の変化）を表すものである（「目を丸くする」、「胸を潰す」、「手を汚す」、「歯が浮く」など）。このタイプの慣用句の意味の成立には、以下のような意味拡張の仕組みが関与している。

- (2) a. 身体（部位）の状態（の変化）によって、精神状態（の変化）を捉える というメトニミー（「目を丸くする」など）
- b. 身体（部位）を、精神活動の容器として捉える という概念メタファー（「頭がいっぱいになる」など）
- c. 感情の高揚を、容器内の流動体の熱を通して捉える という概念メタファー（「腹が煮えくりかえる」など）
- d. 恐れや（恐れを伴う）驚きを、流動体の冷たさを通して捉える という概念メタファー（「胸を冷やす」など）
- e. 感情の高揚を、固体の燃焼を通して捉える という概念メタファー（「胸を焦がす」など）
- f. 善悪を、身体（部位）の清濁を通して捉える という概念メタファー（「手を染める」など）
- g. 境遇の好悪を、身体の位置の上下を通して捉える という方向性のメタファー（「身を落とす」など）
- h. 価値的類似性に基づくメタファー（「骨が折れる」など）

我々は、人間の性質、特定の行為、精神状態という、日常生活において関心を持ちながらもその内実を明確には示しにくいものを、上記の意味拡張の仕組みによって、より明確な形で捉え、表現している。例えば、ある世界・分野と関わることを、ある世界・分野との関与を、泥沼にはまることを通して捉える という概念メタファーにより、「足を踏み入れる」と表現することで、関与することだけでなく、感情的態度や関与を断つ際の困難さなども含意し、単に「関わる」と表現する以上の表現効果が得られるのである。また、喜びを感じている状態を「胸が高鳴る」や「顔をほころばせる」などと表現することによって、表そうとしている喜びをさらに特定して（例えば、期待を伴う喜びか、安堵を伴う喜びかなど）明確に示すことができるのである。

また、慣用的連結句に関しては、問題となる慣用表現の中核的構成要素とみなすことのできる身体部位詞の意味拡張の仕組みを考察し、慣用的連結句を構成する身体部位詞の大部分が、以下の意味拡張の仕組みを経て意味を拡張させていることを明らかにした。

- (3) a. 身体部位の典型機能に関わる行為のフレームに基づくメトニミー
 (「腕 (<技術>) を上げる」、「口 (<摂食者>) を減らす」、
 「目 (<鑑識力>) が肥える」など)
- b. 心情に関わる容器と内容物の隣接関係に基づくメトニミー
 (「胸 (<心>) に聞く」、「腹 (<心>) を固める」など)
- c. 身体における空間的な部分全体関係に基づくメトニミー
 (「顔 (<人>) が揃う」など)

身体部位は、何らかの行為を行ったり、また、ある感情に伴い生理反応が生じたりするという点で、我々にとって極めて際立ちの高いものであり、それゆえ、身体部位詞自体の意味も多様に拡張する。しかしながら、慣用的連結句においてその拡張は不規則に行われているのではなく、上記のように、ある程度一貫している。慣用的連結句においてこの体系的拡張が見られるのは、慣用的連結句を構成する身体部位詞が、人間という存在のある側面(行為や心情)を際立たせ、より具体的に示すためである。

本研究ではさらに、(3)に示される意味拡張の仕組みと、慣用表現以外の環境で用いられる身体部位詞(物体部分詞)の意味拡張についての松本(2000)の分析を比較検討した。物体部分詞としての身体部位詞は、主として位置や形状の類似性に基づくメタファーによって意味が拡張する一方で、慣用的連結句を構成する身体部位詞の意味は、単に位置や形状が類似した全く別の物体を表すのではなく、(3)に示されるメトニミーによって、<行為(に関わる要素)>、<心的要素>、<人>の意味に拡張している。このように、物体部分詞としての身体部位詞と異なり、慣用的連結句を構成する身体部位詞が、<行為(に関わる要素)>、<心的要素>、<人>を表すのは、慣用的連結句が、「特定の評価や感情的態度を示唆するために用いられる」という慣用表現としての特徴を持つためである。

以上のように、本研究では、慣用表現を意味的に分解可能か否かに基づいて「慣用句」と「慣用的連結句」に分類し、それを基に、慣用表現の統語的固定性と、比喩に基づく慣用的意味の成立について詳細な分析を行った。これにより、「身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現」というカテゴリーの全体像を示し、また、我々は、特定の構成要素(身体部位詞)の選択によって、人間という存在の様々な側面を、より明確な形で表現しているということを明らかにした。